



京都府印刷工業組合

秋号

AUTUMN ISSUE

京印季報

Kyoinkiho

2021 AUTUMN

Special Contents:

秋期特別企画

「月曜会創立 50 周年を振り返る」



2021 AUTUMN

1	巻頭言／副理事長 藤井康央
2	秋季特別企画 「月曜会創立 50 周年を振り返る」
7	オフセット印刷学科講習開催
7	技能検定(オフセット印刷作業)実技試験実施
7	委員会だより／技能検定委員会
8	委員会だより／共済委員会
9	委員会だより／組織委員会
10	支部だより／下支部
10	会合だより／京都青年印刷人月曜会
11	関連団体だより
12	統計だより／印刷産業関連指標・京都府工業 統計(印刷業)より
13	パートナーシップ会員NEWS
13	組合員NEWS
14	よしみ散歩～印刷会館周辺地域のご紹介～
14	7月・9月 定例理事会開催概要
14	事務局からのお知らせ
15	新型コロナウイルス感染症に関する事業者向け 支援制度について
16	印刷会館利用状況
16	組合日誌
17	組合員異動
17	パートナーシップ会員異動
17	訃報
17	表紙作画者紹介
17	編集後記


<https://kyoinko.jp/>


10数年前の季報担当委員長
時を思い出し巻頭言を寄稿致し
ます。

当時の最初の仕事が、今年の新年号まで続いていました
表紙作画を今の京都芸術大学こども芸術学科の学生さんに
新たに依頼することと記憶しています。

今も昔も様々なシーンで、何かを変えようとするとなだり
小なり抵抗に遭うことがあります。抵抗は、上り坂を進
むように辛いですが、時に体力や知力をつけてくれます。
ただ、時が経ち、気がつかないうちに楽になったと思え
ば、惰性的になって、下り坂を進んでいることも少なくあ
りません。

京印季報も10年が経ち安定していましたが、笹原理
長による見直し号令のもと、時代に即しリニューアルした
「Kyoinkiho」は、皆様からの声を参考に見直し、3回目
の発行となりました。情報を発信する機関誌としての役割
も含めて、変化や進化の余地は未だ未だありますので、ご
意見を戴ければ幸いです。

さて、オリンピックのテレビ放送でよく耳にした「多様
化」は、これから必要不可欠なキーワードですが、日本の
歴史や文化を併せて考えると、意識して取り組みながら自
然体に身につけていかなければなりません。と同時に、守
るべき伝統や考え方もあり、本質を外さないバランスも要
求されるので、様々な観点から日本を見つめ直さなければ
なりません。

我々印刷業界の業態も、デジタル化を契機に多様化が進
んでいます。1つの方向・1つの答えで当てはまらない時
代になり、手段としての「印刷」の本質と多様化する商材
のヒントとなる研修する場を提供出来るように、当組合委
員会も課題を模索し取り組んでおりますので、一緒に勉強
させて戴きたいと思っております。



京都府印刷工業組合
副理事長 藤井 康央



特別座談会 「月曜会創立 50 周年を 振り返る」

～これからの月曜会に期待する事、
印刷組合との連携～

to the Next 50 years.

8月30日(月)午後1時30分より印刷会館に於いて、当組合の青年部組織である「京都青年印刷人月曜会」の創立50周年を記念した特別座談会を開催致しました。

座談会では、月曜会創立50周年記念事業と記念式典(8/28 於 京都ホテルオークラ)を開催した代表として山下昌毅月曜会会長、谷口力周年事業実行委員長とともに、月曜会OBとして理事長を務められた吉川宣治(OBとしては初代)、瀧本正明、中西隆太郎、そして現理事長の笹原あき彦の各氏をお招きし、月曜会の歩み、成り立ちなど50年間の変遷を振り返るとともに、これからの月曜会に期待する事、組合事業との連携を通じた業界の展望等、情報伝達産業の一員を担う私達の明るい未来像についてじっくりディスカッションして頂きました。

今回の特集では、特別座談会の要旨をご紹介します。是非ご一読下さい。

出席者

■吉川 宣治氏

京都府印刷工業組合 顧問
(株)吉川印刷工業所

■瀧本 正明氏

京都府印刷工業組合 顧問
(株)やまとカーボン社

■中西隆太郎氏

京都府印刷工業組合 顧問
中西印刷(株)

■笹原あき彦氏

京都府印刷工業組合 理事長
文屋秋栄(株)

■山下 昌毅氏

京都青年印刷人月曜会 会長
(有)修美社

■谷口 力氏

京都青年印刷人月曜会
創立50周年記念実行委員長
谷口紙工(株)

■波部 郁司氏

京都府印刷工業組合 理事
広報委員長
(株)波部太陽堂



【座談会参加者】

後列左より 波部郁司氏、山下昌毅氏、谷口力氏

前列左より 笹原あき彦氏、瀧本正明氏、吉川宣治氏、中西隆太郎氏



月曜会に加入された時期、参加するきっかけについて

波部：組合の広報委員長を務める波部です。本日の司会を務めさせていただきます。ご協力宜しくお願いします。残暑厳しい中ご参集頂き誠にありがとうございます。本日は、組合の青年部組織である「京都青年印刷人月曜会(以降 月曜会)」が創立50周年を迎えたことを記念し、これまでの変遷を振り返るとともに、本組合との連携を通した明るい未来に向けたお話を聞かせて頂ければと思っています。

それでは、はじめに月曜会に入会された時期と参加するきっかけ等について、お聞かせ下さい。



吉川：月曜会に加入したのは活発に研修会をされているのを見て勉強になるだろうと思ったからです。加入後は会員の仲間から様々な情報を得ることができ、仕事上でも助けてもらうことが多々ありました。

瀧本：月曜会に加入したのは、先に入会した会員に紹介して頂いたのがきっかけでした。当時は印刷業態毎にグループができていたような雰囲気がありましたが、業界が活性化するには仲間同士が力を一つに合せなければなりません。少しずつ、年を重ねる毎に仲間意識が強くなっていったように思います。



中西：私が加入したのは1978年頃でした。ところで、なぜ会の名前を「月曜会」とされたのでしょうか。月曜日は週の初めで忙しく一番憂鬱な日です。その憂鬱な夜に会合を開くのが不思議でした。入会当初、慣れない業界での仕事に疲れ果ててしまい、真っすぐ自宅に帰ったとき、松崎元氏(松崎印刷(株))から電話が入り、「今からでもよいので合流するように」と熱心に誘って頂きました。このような先輩方がおられたからこそ長期に渡り活動が続いているのだと思います。次の世代を担う、業界の若者たちが交流すること自体に大きな意義があり、私自身、貴重な財産になったと思っています。

笹原：私が加入したきっかけは、吉川顧問が月曜会に所属されていた時、「育てたい若手がいるなら是非加入を」と、当時ご縁のあった会社の代表を通してお声掛け頂いたことでした。毎月勉強会を開催し、また旅行も毎年行なうなど、和気あいあいと活動していました。



山下：第50期の本年4月より月曜会の会長を務めさせて頂きました。私が月曜会に加入したのは、藤井康央氏(共栄印刷紙業(株))が会長をされていた2003年から2004年頃です。父も月曜会出身でしたので、印刷業界に足を踏み入れた時から月曜会のことは知っていました。当時は20代半ばでしたが、会の先輩方から印刷だけでなく人生に役立つ様々なことを教わりました。加入して間もなく同世代の仲間と役員を務めることになり、更に交流が深まりました。

谷口：50周年の記念式典の実行委員長を務めさせて頂きました。私が入会したのは2010年です。翌年が40周年で、その準備の会議が行われていたのを覚えています。その頃は私が10年後に50周年の実行委員長を務めるとは夢にも思っていませんでした。加入のきっかけは、森田隆司氏(㈱森田美術印刷)に紹介して頂いたことです。月曜会に入会したことで、全国印刷緑友会(以降 緑友会)の会員とも交流ができ、また瀧本顧問からお誘い頂き、本組合にも入会することとなりました。



波部：最後に私からも一言述べさせていただきます。実は私も月曜会に入会しており、活動に参加しています。私が加入したのは瀧本顧問が会長を務められていた時で、きっかけは、為國専務理事(㈱ティ・プラス)のお母様(為國千鶴子氏)より、レディースクラブ・オリーブ会で私の母を通して加入を勧めて頂いたことです。45期のときに会長を務めさせて頂き、緑友会や全国青年印刷人協議会(以降 全青協)の会合にも参加させて頂き、大阪や神戸を始め全国の仲間との交流が深まりました。月曜会に加入して本当に良かったと思っています。



月曜会の歩み、成り立ち

波部：ここからは、月曜会の歩みや成り立ちについてお聞かせください。

中西：私が加入した当時、1978年頃の月曜会は、実は二度目に発足した会です。最初に二世会として立ち上げられた月曜会が活動を止められ、その後、松崎元氏(松崎印刷(株))、梶本毅氏(正美社印刷(株))、川勝一清氏(商法社カワカツ印刷(株))、江戸宏介氏(共同印刷工業(株))などの諸先輩が幹事となられ、名称を襲名して二度目の月曜会を発足させたと聞いています。

谷口：50周年の起点となる、二度目の月曜会の発足については組合の機関誌「京印季報」(1978年5月号(No.273)12~14頁)に紹介されています。歴代世話役人座談会「発足より5年を振り返って」という記事です。月曜会創立50周年記念誌の38頁から39頁にも掲載されています。

山下：記事の中に、私達の発足より前に月曜会が活動していたことも記載されています。

吉川：一度目の月曜会は、発起人の一人がヨーロッパの視察から帰り、自分たち若手経営者は先駆者としてもっと勉強が必要との考えで発足されたと聞いています。その後、勉強ばかりでもいけないと、交流会も積極的に行われていたようです。勉強会を了えた後の懇親会は盛会で、月曜会は遊びの会と思われるほど仲がよかったようです。

青年部の全国組織として、当初は緑友会が主な活動母体でしたが、その後、東京工組の呼びかけにより、全印工連傘下の全青協が発足されました。それまで緑友会が全国的な大会や勉強会を主催してきたのに突然別の全国組織が立ち上がったのですから複雑な思いもあったようです。月曜会は緑友会、全青協の両方に所属することにしました。今考えると賢明な選択だったと思います。他府県では、同じ地区に緑友会系と全青協系の二つの青年部組織があるケースもあります。全青協に所属することは親組合の意見が入るという一面もありますが、月曜会は上手に対応されていると感じています。

瀧本：緑友会は全国レベルの会合が年に3回あります。

吉川：全青協は、組織として本組合の傘下にありますがイベントが少ない。緑友会は独自の考えでセミナー等を企画しているようです。

波部：プリントネクストというイベントもその一つですね。

山下：プリントネクストは、緑友会と全青協と(一社)日本グラフィックサービス工業会の青年部が主催団体です。全青協は2年任期のため、月曜会では直前会長の江戸氏と私が参加させてもらっています。毎年、全国と地区の協議会があり、直近では大阪で近畿ブロック協議会の開催が予定されています。

波部：地方では緑友会から全青協に移る青年部が多く、緑友会の会員数が減っています。最近是全国セミナーも全青協と協力して行うことがあります。以前と違い、全青協と緑友会の距離は縮まっていると思います。

中西：月曜会の全国規模のイベントの取り組みとしては、最初は1986年度(1987年2月)、緑友会創立30周年のときのセミナーを京都が引き受けました。私が司会だったのでよく覚えていますが、講師は、後に能楽の金剛流26世宗家を継承された金剛永謹氏、西陣織工業組合理事長 川島春雄氏のお二人に務めて頂きました。また、1999年度(2000年2月)、緑友42周年のときのセミナーも京都で開催しています。2003年度、緑友46周年のときの総会も京都で開催しました。

瀧本：私がよく覚えているのは、鹿児島での緑友会の会合において、京都が2回目のセミナー開催を受けたことです。森田隆司氏(有森田美術印刷)に実行委員長を務めて頂き、二人三脚で準備のために何度も全国の会議に参加しました。開催を了えた後も、お礼のために諸行事に参加しました。年に3回から4回、全国の主だった役員と顔を合わせるようになり、自然と交流も深まりました。



座談会会場



これからの月曜会に期待する事、 印刷組合との連携について

波部：ここからは、これからの月曜会に期待されることや、印刷組合との連携についてお聞かせ下さい。

中西：印刷組合を発展させる、次の世代を背負っていく人を育てる場という意味で、月曜会は重要な組織だと思います。若い内から月曜会で気心が知れていると、組合の活動においても顔なじみになっていて直ぐに仲良くなれる。仕事の依頼も単刀直入に話ができる。加えて若い内から業界の課題等も勉強できます。一方で、今後も長期的に永続していくには、人を引きつける魅力のある組織であり続けなければならないと思います。

吉川：私の加入していた時代は40歳の定年制度があり、会員数の減少が顕著な時期もありました。そのときの救世主が瀧本氏でした。一生懸命会員を集めて下さり、盛り返してくれました。

笹原：会員を増やすための工夫はあったのですか？

中西：定年を45歳、50歳と段階的に改定しています。しかし、これは若い人の活躍の時期を遅らせることになり、あまり得策とはいえなかった。

瀧本：当時は本組合の会員でないと加入資格がありませんでした。そこで会則を変えて、印刷関連業も加入できるようにしました。

笹原：私の時代には増員目標があり、若い人がいると聞けば、会社に訪問して入会案内を届ける活動をしていました。後輩たちにも同じ活動が引き継がれているようです。

山下：最近も「月曜会、入ってくださいキャンペーン」を行いました。

谷口：会員が増えることで直ちに商売上のメリットがあるわけではありません。にもかかわらず、一生懸命加入増強に努め、月曜会を盛り上げようという姿勢に感服します。その動機は、業界を盛り上げようという一心からでしょうか？

瀧本：一業界人として、未来に向けた夢を、次の若い世代の人達に引き継がなければならないとの思いからです。そのためには、青年部組織の拡充が大事です。気心を知っている、知らないでは大きな違いがあります。他府県の中には、青年部がないため元気がない本組合もある。月曜会の組織力は全国でもトップクラス

だと思っています。

笹原：ところで、全印工連ではDX(Digital Transformation: Trans=X)を推進しています。デジタルで繋がることはとても大事けれども、知らない人とグループを作ることはできません。アナログ的な人的ネットワークを備えていることが大切です。顔が見え、この人なら何かあったときもきちんと対処してもらえるという信頼感が必要です。月曜会は、信頼感が深く結びついた仲間同士の集まりだと思います。

DXのメリットの一つの例です。これまで私達は、菊全の印刷機があれば、菊全の機械を回さなければならず、このようなとき、お客様は小ロットでいいと言っても、自社の都合で菊全の仕事を取りに行ってしまうものです。信頼できる仲間とDXグループを構築することで、この制約から逃れることができます。自社の設備(菊全機)に拘らず、思い切って外注先に依頼するという選択ができます。今すぐ菊全印刷機を手放すというわけではありません。印刷機が老朽化した時、次の一手として信頼できる外注先を見つけておき、自社をスリム化して利益を生む体制を作っておくことが重要だと思っています。外注受の会社に自社の特化を進めるのも一つの考え方になるかもしれません。

山下：これから印刷会社数は減る一方だと思っています。得意な分野で小ロットの仕事を行う会社と大量生産を行う会社に二極化していくでしょう。月曜会の会員を見ても、これから新たに印刷会社を始めようという人は見当たりません。一方で、昨年カメラマンの方に加入して頂き、新しい風が吹いたように思っています。制作会社やデザイン事務所にも加入して頂けると、仲間同士の仕事の流れも今以上に円滑になると思っています。他方、印刷会社の加入は中々増えません。

吉川：印刷だけでなく、カメラマン、企画会社など幅広い分野に加入を勧め、広い見地からこれからの印刷業のあり方について、お互いに知恵を絞ることが必要だと思います。いつの間にか「紙なんて要らない」、「ネット通販で十分」といわれる日がくるかもしれません。それに対抗するための対策を考えておかなければなりません。

山下：ネット通販も仕事の一つとしてあり得と思っています。電子書籍も同様です。本も紙で作り、更に電子書籍も売ればいいのではないのでしょうか。印刷業だから電子媒体はやらないという変なプライドが業態変革を邪魔しているように思います。

中西：木版は江戸時代からの技術です。明治10年位から活版印刷が普及しますが、木版は明治20年位まで残っています。活版の時代は100年位続き、その後

平版が誕生、活版に代わって主流になり現在に至ります。その次に電子の時代が来る訳です。ただ、一気にその先を考えるのではなく、どのようにして変わっていかばよいのかについて、若い視点で親組合に提案して欲しいと思います。当社では、今はオンラインジャーナルや電子出版に取り組んでいます。世の中の流れに抗うことはできません。その時代に合わせ、新しい情報を収集し、情報を活かしてどのように変化するのがよいのかを考えればよいと思います。

吉川：電子出版も作ることは難しくありません。肝心なのは、データを加工して売り込むための提案力です。実際、対策が出来ている他府県会社では、例えば月刊誌を十種作成し、そこから抜粋して会員に必要なものだけ販売するという仕事の手法をされています。

笹原：月曜会の記念講演会で、講師の村西とおる氏が「まだまだ紙の可能性がある」と述べておられました。モノを売るために、自ら印刷物を企画して作ったというストーリーでしたが、これは受注産業である私たちの業界の常識とは違う発想です。瀧本顧問が理事長の時代に述べられていた「仕事(こと)づくり」にも共通する考えです。

私たち京印工組は、吉川理事長の時代より「情報伝達産業」という言葉をずっと使い続けてきました。それは、私たちは1つの文化を担う、情報を伝達する産業に携わっているという誇りを持たなければならないということだと思っています。しかし、情報を伝達する手法として印刷にこだわる必要は全くないのです。その時代にに応じて、一番適するのがオフセット印刷だったり、活版印刷だったり、今後はネットかもしれ

ないし、電子媒体かもしれない、文化を預かる、情報を伝達する役割を担うという立場に立てば、その手法は多様であり、発想が違ってくるのだと感じました。

中西顧問は理事長時代に「組合は情報の宝庫」であるとおっしゃり、この困難な時においても私達の進むべき方向を示してくれる多くのヒントがここにあり、それを活用することで経営の舵取りに役立てて欲しいと述べておられました。

今は潮目が変わる大きな転換期だと思います。私達中小企業は50年前から経営環境が厳しいと言い続けてきました。しかし、これからはもっと厳しい時代がくると思います。自分の子供の代に事業を繋げることを考えたとき、或いは若い人にこの業界に入ってもらったことを考えたとき、何より重要なのは、利益をしっかり確保できる体質を作ることです。そのために何をしてもいいという訳ではなく、遵守すべき法律もあるし、ポリシーもあるでしょう。それらを踏まえた上でしっかりと利益を生む。難しいことですが、そのための方法を考え取り組まなければなりません。

京印季報を通してこの座談会の要旨を読まれた方が、印刷組合はいいな、月曜会という青年部は魅力的だなと感じて頂き、1人でも多くの方が印刷組合、月曜会にご入会下さり、業界全体がこれまで以上に固い絆で結ばれる、そのようなことになればうれしいと思っています。長時間ありがとうございました。

波部：まだまだお話は尽きないところですが、このあたりで了解したいと思います。本日はご多忙の中、本座談会に御出席賜り、そして貴重なご意見、ご提言を聞かせて頂き誠にありがとうございました。



座談会会場